

ネット 漂流

狙われた子どもたち

Vol.73

コロナ3年目で見えだした 児童への影響



NIIT情報技術推進ネットワーク株式会社
篠原 嘉一（しのはら・かいち）

コロナが3年続き生活習慣にも変化が目立つようになってきたが、実は児童に影響が出ているように思う。小学校に向いた際に高学年児童に聞いてみると低学年の口が悪くなっているという意見が大変増えてきた。幼い頃にネットを使わせる習慣がなかった一般家庭も動画視聴をする機会が増えてしまったのがコロナの影響だと思う。令和4年度の小学4年生は幼い頃にあまりネットを使わせてもらえなかった年代になる。

コロナ当初に入学式を迎えた小学1年生は、現在小学3年生の3学期だ。この4年生と3年生にコロナ禍の差が出てきてしまった。現在、小学1年生は親のスマホで動画サイトを就学前から頻繁に視聴していた学年だ。コロナ禍でリモート化が一般的になりタブレットも大変普及した。テレビもネットに対応しているため、動画サイトはお留守番させるいい口実になっている。

子どものいる家庭には何台の端末があるかを調査しようか。この1年間、訪問先の学校で調査してみたが1家庭に10台から15台のWi-Fi対応端末がある。ゲーム機の所持率も一気に複数台に増えている。

親の機種変更後の古いスマホもそのままWi-Fiで動いている。動画を見る程度なら各自1台ずつ持てるほど家庭内には端末が転がっている。

有料版動画サービスのAmazonプライムやNetflixなら年齢制限やリスクの高い動画は再生されないのだが、無料で視聴できるYouTubeやTikTokの方が利用している家庭が多い。この無料で視聴できる手軽さが幼い子どもにも影響を与えているのだが、家族はそこまで思いが及ばないのかもしれない。有料版動画サービスはあくまで編集された営業動画だが、無料の動画サイトは個人の投稿動画であり、過激な表現や残酷な表現も多く含まれている。YouTubeは視聴推奨年齢が18歳だ。18歳禁のゲーム攻略動画やウクライナからの動画投稿も見受けられる。TikTokは13歳以上だが、暴力的な動画も大変多い。いずれのサイトもペアレンタルコントロールなどで保護者が規制をかけることができるが、対応していない家庭が大変多い。この手の動画サイトを1日に何時間見ているかという調査が多くの学校で行われている。

る。回答は概ね1日2時間とのことだが、テレビ視聴の2時間とは全く違う。

テレビはコマーシャルが15分ごとにあり、集中が途切れるのだが、動画サイトは連続再生や倍速再生ができる。つまり集中して過激な動画を目にする機会が大変多いのだ。かわいい動物の動画やダンス動画を見ている場合と、刺激の強い動画を見ている場合とでは、幼い子どもの脳に与える影響が違う。大学の研究でも発表されているが、ネットの動画やゲームの強い刺激が依存症の起因となっている。

乱暴な動画やゲームをなぜ、子どもたちが見てしまうのか。それはスマホの「あなたへのおすすめ」の機能が影響している。スマホやタブレットはマーケティングと称して端末のマイクで拾う音声も取り込んでいる。外部に盗聴されているわけではないのだが、スマホやタブレットの周りで話している会話などから「あなたへのおすすめ」を選択しているため、対戦型ゲームで乱暴な言葉をしていると、当然乱暴な動画が表示されやすい。7月に安倍元首相が銃撃された様子が動画サイトに投稿されているのだが、大人はニュースでしか、安倍元首相の動画を見ないのに対し、子どもたちには、今でも毎日のように安倍元首相の銃撃画像がお勧めとして配信されている。学校での聞き取りでもクラスに数名は毎日出てくるという。幼い子どもたちの話し方が変化していないか？ 地元の方言を使わなくなっていないか？ これまでと家庭環境が変わってしまっただけにあらゆる世代が気づく必要がある。